



Kobe Shoin Women's University Repository

| | |
|------------------------|---|
| Title | 哀歌の詩的技法（1） Poetic Devices in the Book of Lamentations (1) |
| Author(s) | 勝村 弘也 (Hiroya Katsumura) |
| <i>Citation</i> | キリスト教論藻 (KIRISUTOKYO RONSO) Bulletin of the Institute for Research of Christian Culture, No.29 : 1-33 |
| Issue Date | 1997 |
| Resource Type | Bulletin Paper / 紀要論文 |
| Resource Version | |
| URL | |
| Right | |
| Additional Information | |

哀歌の詩的技法(1)

勝 村 弘 也

1. はじめに

ボランティアとして阪神大震災の被災地を訪れた歌手 Rattlesnake Annie は、アメリカ先住民の子孫として、苦難、迫害、虐殺、このようなことばが何を意味しているのかを知っている。彼女が被災地で作詞作曲した歌、The Great Hanshin Earthquake には以下のようにある。

It took away our homes and our children
And nobody knows what that means
Could it be another warning
When the Great Hanshin Earthquake came calling

Now we're building up from the ashes
Like so many times before
We are alive to tell the story
When the Great Hanshin Earthquake came calling

ここにはひとつの洞察が示されている。苦難の〈意味〉、それはだれにも分からないが、われわれは生きる中でそれを繰り返し問わざるを得ない。そして破局を経験しながらも生き残った者は、出来事を語り伝えるために生きて

いるのだという洞察である。過去の〈限界状況〉は、もしもわれわれがそれを忘れまいと決断して、繰り返し想起するならば——ここでは社会現象としての破局やその想起が問題になっているのだが——、現実への深い洞察を生むであろう。そしてそれが、語り伝えるという行為を通して歴史認識へと発展するならば、過去の破局的出来事は現実に対する〈警告〉としての意味を獲得するはずである。なぜなら、このような出来事を語ろうとするや否や、われわれは問題の出来事の前に何があったかを懸命に思い出そうとするし、可能な限り考える原因を探ろうとする。そして、このような作業を通して、当初はまったくの偶然に過ぎないと思われた災いの出来事の背後に、各人の理解の地平に応じて何らかの〈前兆〉があったことや、〈因果の連鎖〉を発見するにいたるからである。⁽¹⁾

旧約の中心的出来事のひとつに紀元前587/6年に起こった、ユダ王国の都イェルサレムへのバビロニア軍の侵入と神殿破壊がある。この出来事は単なる敗戦ではなかった。2度にわたる社会の上層部のバビロンへの強制連行によって、ユダ王国の住民たちは引き裂かれた。列王紀下25章によるとゼデキヤの処罰と連行の直後に、バビロニア軍による都の徹底的破壊と神殿掠奪が起こった。ほとんどの知識人や職人を失った社会は、それでも少しは残されたはずの指導者たちの内部分裂によって崩壊する。前589年から始まったイェルサレムへの包囲攻撃とそれにとまって民衆に起こった飢饉は、この時から長く続く苦難の始まりに過ぎなかった。⁽²⁾ 哀歌は、都の民の身体的な苦しみを描いているだけではない。神殿の破壊掠奪を頂点とする都の破滅は、神の激しい怒りの現われ（例えば2章前半、4章11節参照）と考えられたのであり、この破滅はユダヤ人たちに精神的な危機をも招来した。したがって、哀歌には破局的出来事の〈意味〉への問いが満ち満ちているのである。このような民の苦難と苦悩、神に向かっての心の内奥からの意味への問い掛け、これこそが哀歌を構成する5つの歌の底流を貫くメインテーマである。

旧約の民であるユダヤ人は、前587/6年以降に体験したこの歴史的破局を単なる偶然の災難であるとは無論考えなかった。彼らは、おそらく出来事

の直後からこの災いを〈神の怒り〉〈神による計画の遂行〉(2章17節、4章16節参照)であると感じ取った。それはひとの罪に対する神の審判であった。そのような意味で、彼らはこの破局とそれに先立つ歴史との間に因果の連鎖を認めたのである。しかしながら、われわれは、哀歌テキストの背後に、現代の神学者たちがともすれば想定しがちなように、苦難の問題に対する神学的解答のようなものを探すべきではない。——ましてこの書全体から、苦難の中にほのかに見える将来への希望の光を見るべきではないだろう——。また、哀歌テキストの背後に立っている詩人が、一種の知的な高みからなにか完成された〈歴史神学〉のようなものをもって、現実に関心した経験している苦悩の原因を説明しようとしているのだと考えることも見当外れではないだろうか。⁽³⁾ 私見によれば、哀歌の5つの歌には成立年代の異なるものが含まれているように思われる。したがって、仮説的にそこに一連の思想的な発展を見ることも可能であろう。しかしながら、聖書の他の諸文書から仮説的に構築された神学——例えば申命記学派の歴史神学——を、5つの歌の背後にも認めることをもって、解釈の鍵を手中にしたと考えてはならないだろう。⁽⁴⁾ これらの歌の著者あるいは編集者たちは、それぞれの置かれていた状況の中でこの破局を繰り返し想起することによって、意味への問いを繰り返したのである。苦難の問題は、いかなる理論をもってしても説明することが出来ない。この点で、Michael S. Moore が1983年に発表した「哀歌における人間の苦しみ」と題する論文は、非常に啓発的である。⁽⁵⁾ 哀歌はまさに〈苦難の書〉である。

この苦難の書を生み出した詩人が、容易には解答を見つけることの出来ない問いを歴史的体験の中から問いつづけたのであるとするなら、それもまた独自の意味でひとつの歴史認識と呼ぶことが出来るであろう。しかし、このような彼らの歴史認識と文学活動とは表裏一体の関係にあったのだから、われわれは従来よりも精密に作品に現われた文学的な技法を調べてみる必要がある。しかる後に、彼らの思想についても適切な仕方で論じることが可能となるであろう。

2. 哀歌研究の問題点

2.1. 正文批判（テキスト・クリティーク）

ヘブライ語原典（マソラ）は、比較的よく保存されているとされている。しかしながら、このことは必ずしもテキストの理解を容易にするものではない。もっとも有力な古代語訳である哀歌の七十人訳は、マソラと本質的に同一と見られる本文に基づくものらしい。シリア語訳に関しても事情は同じとされる。つまりマソラに誤記の嫌疑がかかった場合に、それと比較するべき手がかりがほとんど存在しないことになる。⁽⁶⁾ BHS の欄外注の分量が少ないのはそのような事情による。哀歌のヘブライ語はけっしてやさしくはない。したがって、マソラを批判的に読みながら正文を確定し、ひととおりの訳文を作成するだけでもたいへんな作業になる。欧米ではこの分野での学術論文が相当数生み出されている——例えば七十人訳に加えてシリヤ語訳を積極的に正文批判に取り入れた B. Albrektson の研究⁽⁷⁾ など——。このような事情から、それぞれの研究者が呈示する哀歌の翻訳には、相当の違いが生じてくることになる。なお、新共同訳と口語訳を比較すると、新共同訳には近年のこの分野での研究の成果が、かなり反映されていると思われる。

正文確定の作業は、作品の文学的な技法の研究や著者の思想の研究と循環的な関係にある。哀歌に関して言えば、このような研究は十分ではない。

私訳の作成に際して、正文批判の分野で重要視したのは、H. Gottlieb の研究書、Rudolph と Hillers の注解書である。⁽⁸⁾

2.2. アルファベット歌

周知のように哀歌は、ユダ王国の滅亡の出来事をテーマとしたきわめて技巧的な詩文学作品である。5つの歌のうち4つまでがいわゆるアルファベット歌になっている。第1歌と第2歌はそれぞれ3行——各行は前句と後句からなる——からなる22節から構成され、⁽⁹⁾ 各節の冒頭には、アーレフ、ベート、ギームルとヘブライ語のアルファベットの字母が順序にしたがって配列されている。この場合、それぞれ3行からなる区切り（これら2つの歌では

〈節〉と一致する)を〈連〉として扱うことができる。⁽¹⁰⁾ 第3歌は、われわれの聖書では66節から構成されているが、各節は1行からなる。アルファベットの各字母は、3節(行)ずつ配置されている非常に技巧的な歌になっている——たとえば1～3節の冒頭がアーレフで始まる——。この歌に第1歌、第2歌と同様の〈連〉を認めることが出来るか否かは、検討の余地がある。第4歌は、1節がそれぞれ2行からなり、各節の冒頭にはアルファベットの字母が順序にしたがって配列されている。第1歌、第2歌とよく似た構成を示すが、3分の2の長さとなる。第5歌は、22節(22行)よりなっているが、いわゆるアルファベット歌ではない。しかし、各節の冒頭の文字をつなげて読むと、何らかの意味を生じないのかどうか、議論の余地がある。⁽¹¹⁾ 苦難をテーマとし、きわめて深刻な内容をもつこれらの歌が、一見、遊戯的と思われるアルファベット歌の形式にこだわっているのはなぜなのか。その理由は分かっていない。

2.3. 文学類型

H.Gunkel は、第1,2,4歌を〈政治的挽歌〉ないしく政治的葬送歌(politisches Leichenlied)と名づけた。⁽¹²⁾ たしかに、これらの歌では——特に第1歌では——滅亡した都イエルサレムは擬人化されている。しかし、このような名前の類型を立てることが適切であるとは、ほとんどの研究者が考えていない。第3歌には、〈個人の嘆きの歌〉の要素が認められるが、他の類型の要素も多々認められる。第5歌は〈民の嘆きの歌〉の類型にあてはめることができる。

Kraus は、シュメールやアッカドの同様のテーマをもつ嘆きの歌との比較から、哀歌全体を「破壊された聖所についての嘆き」の類型にあてはめて考察した。Kraus は、作品のおかれていた〈生活の座〉として、廃墟となった聖所での嘆きの祭儀を想定している。⁽¹³⁾ このような説に木田献一は、全体として賛成しているが、左近淑は否定的である。⁽¹⁴⁾ ここでの問題は、シュメールやアッカドの哀歌と聖書の哀歌との間に、文学的な依存関係とまで言えるような影響が認められるか否かに存在する。Kramer は、シュメールの哀歌が旧約の哀歌に直接的な影響を及ぼしていると主張し、アッシリア学者の Gadd

もこれに賛同した。しかしながら、Rudolph や Eissfeldt 等はこれを否定した。⁽¹⁵⁾ほとんど決定的と思われるのが、McDaniel による反証である。⁽¹⁶⁾ 彼によれば、シュメールの哀歌と旧約の哀歌の見かけの類似は、両者が共通の題材を扱っている所からくる。両者の用語上の並行現象も、一般に旧約がメソポタミア文学の影響下にあるものとして十分説明出来る。例えば「彼(=ヤハウエ)は高い所から火を送った」(哀歌 1・13) は、「ウル滅亡哀歌」259-60行と比較されるが、征服された都市の炎上を神からの火とするのは、古代オリエントでは一般的なものである。哀歌 2・4 ~ 5⁽¹⁷⁾の「敵のように」は、「ウル滅亡哀歌」253行、374-75行と比較される。しかしヤハウエを敵とするモチーフは聖書の他の箇所にも見出される(出エジプト記23・22、イザヤ書63・10)。哀歌 2・8・3⁽¹⁷⁾の「塙をも壁をも彼は嘆かせた」は、「ウル滅亡哀歌」48行)と比較される。しかし、このような擬人化の技法は、旧約では珍しいものではない(イザヤ書3・26、ホセア書4・3参照)。

ともかく、哀歌を文学類型の観点から解釈しようとする試みは、成功していないと判断される。

2.4. 著者、統一性、成立年代

エレミヤ著者説は、非常な長期間にわたって強固に維持されてきたのであるが、Wiesmann の学説を最後として、その後この説を唱える有力な学者は存在しなくなった。⁽¹⁸⁾ 現在では、著者を個人として特定することは不可能であると考えられている。この書の語彙や語句の用法などの特徴からすると、たしかにエレミヤ書とのつながりが強く認められる。しかし、同時代の他の文学、エゼキエル書、詩篇、第二イザヤなどとの類似も明確に認められるから、このことは著者問題に関して決定的な証拠にはなりえない。また言うまでもなくエレミヤ書のすべてが預言者エレミヤのことにさかのぼりうるという保証もない。

哀歌を構成する5つの作品が、構造的に綿密につながっていることは、最近の J. Renkema の研究がかなり解明したといえる。⁽¹⁹⁾ 彼の取っている方法

は、きわめて〈機械的〉と思われる単語および句の比較であるが、そのやりかたは徹底している。その結果の概略は以下のようである。まず、第2歌と第4歌がもっとも類似している。次に第1歌と第5歌もよく似ている。第3歌と第2、4歌との結合はあまり強くなく、その距離は、だいたい第1歌と第4歌や第2歌と第5歌の距離に等しい。第1歌と第2歌および第4歌と第5歌の結束性は強い。要するに、全体として第3歌を中心とする集中構造が認められるというのである。なお、第3歌と第5歌との結束性も強いと言える。Renkemaは、このような観察から、複数の著者が異なる時代にこれらの歌を作ったとは認められないと結論している。⁽²⁰⁾彼の主張には無視できないものがあるが、後述するように、その分析の仕方はしばしばきわめて機械的であって、十分な批判に絶えられない箇所が一読しただけでも散見される。現在の聖書テキストが非常に精密に構成されていることだけから、単一著者説を結論するのは、論理の飛躍と言うべきであろう。

5つの歌の成立年代については、その統一性に関する議論を含めて、5つの作品それぞれに関して厳密に論じられる必要がある。現在の学界に定説は存在しないが、だいたいの傾向は認められる。第1歌では擬人化や比喩的表現が目立っているが、町や神殿の徹底的破壊に関して直接的に語っている箇所がない。Rudolphは、このことからこの歌を第1次バビロン捕囚と結びつけて解釈したが、その後発見された「バビロニア年代記」によって、この時には飢饉(11,19節参照)が発生するほどの長期の包囲攻撃はなかったことが明らかとなって、この説は否定された。⁽²¹⁾第2歌と第4歌は、紀元前587/6年の出来事の直後あるいは比較的近い年代に成立したと考える者が多い。第1歌はこれらの歌の後から成立したとするのが妥当のようであるが、その年代に関しては捕囚期から前5世紀までの説がある。第5歌に関しても事情は似たりよったりという所である。⁽²²⁾第3歌が、全体の雰囲気からして他の作品よりも後代のものであると推定する者が多い。⁽²³⁾ただし、他の作品と同じく紀元前587/6年の直後とする者もいるし、前4世紀や3世紀に年代付ける者もいる。

Kaiserは、これらの問題を解決するためには以下の3つの観点からの究明

が必要であると述べている。⁽²⁴⁾ (1)個々の作品が前提としている伝承。(2)前提となっている歴史的状況。(3)5つの作品の相互関係。本論考においては、まず(3)の観点から作品の成立順序を明らかにしたい。次に(2)の観点から年代決定の手がかりを少しでも掴みたい。そして最後に、聖書の他の文学との関係や思想が問題となる(1)の観点からも考察してみたいと思う。

2.5. 文学的技法

哀歌に関する文学的技法の研究は十分とは言えない。その中で注目すべきものは、まず Hillers の注解書に含まれている「……の娘」という表現に関する簡単な考察である。⁽²⁵⁾「シオンの娘」のように比喩的に用いられる「……の娘」あるいは「おとめ、……の娘」という定型句は、Hillers によると哀歌に20回も用いられている。旧約の他の文書全体で45例であるから、小さな文書にすぎない哀歌でいかに集中的に用いられているかが分かる。なおエミヤ書にも16回用例が数えられるが、そのうち「わが民の娘」が8例もある。預言者イザヤやミカも「シオンの娘」を使っているから、このような表現法自体は、少なくとも前8世紀にはあったと見なければならぬが、これがさかんに用いられるようになったのは、前7～6世紀であったと考えられる。哀歌ではこのような定型句は、都エルサレムやその住民をひとりのおとめにととるための技法として用いられている。この技法の詳細は、後述する。

Moore は、Hillers の考察を受けて、このような表現の哀歌における分布を調べるとともに、「幼な子」「乳飲み子」「少年」「若者」「おとめ」「母」「父」「老人」などの登場人物に焦点を当てて、彼らの苦難がいかに描かれているかを分析した。⁽²⁶⁾

Renkema の構造研究の特徴は、各作品の語句の分布を徹底的に調べた点にある。その結果、いろいろなレベルでのインクルジオを見い出している。連の内部構造を分析したり、段落構成を明らかにしようとする点にも特徴が認められる。このような研究法が一定の成果を挙げていることは否定できないとしても、その欠陥も明らかである。作品の下部の構造を支える単位としての〈連〉の設定やより上位の単位としての〈小段落〉や〈大段落〉への区分

は、第1歌の場合には、比較的うまく行っているように見える。しかし、第2歌以下に関しては、理論を無理に作品に当てはめようとしている⁽²⁷⁾。その結果、ありもしない整然とした構造を作品に認めようとする結果に終わっている。テキストの表現しようとしている意味を、真剣に捉えようとせず、いたずらに〈構造〉を探求しようとしているとの感を抱かざるをえない。なお彼が分析した各作品の相互関係については、すでに言及した。

この論考においては、テキストの意味との関係で、語句の分布について調査する。つまり、比喩がどこでどのような仕方で成立しているかと言ったレベルの問題にも焦点を当ててみたい。そのためにもまず、厳密な正文批判を踏まえて、語句の分布にも十分な考慮を払った逐語訳を呈示することにする。

3. 【付説：ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚】

ここでは哀歌成立の歴史的前提となっている出来事について、さしあたり紀元前580年頃までを取り上げてみたい。叙述にあたっては、S・ヘルマンとJ・ブライートのイスラエル史等の他にエレミア書に関連する文献を参照した⁽²⁸⁾。

3.1. 前609年のヨシヤ王の戦死まで

《ヨシヤ王の登場まで》

ヒゼキヤ王（715－697年）の時代にイェルサレムはセナケリブの率いるアッシリア軍によって包囲されたが、奇跡的に救済された（701年、列王紀下19章参照）。マナセとアモンの時代は合計57年に及ぶが（697－640年）、聖書はこの時代について簡単にしか記していない（列王紀下21章）。アッシリアの圧倒的な力の前では、二人の王は徹底した親アッシリア政策をとる以外に方法がなかったものと思われる。聖書は、このような政策に関連していわゆる「マナセの罪」を描き出している。しかし、歴代誌によるとマナセは、晩年になって回心したようでもある（歴代誌下33章11節以下）。彼がユダの要塞を強化することが出来たのは、しかしながら、アッシリア側の勢力がエジプトに対する防備を固めるためであったと考えてよい（ブライツ説）。

《ヨシヤ王による改革、預言者エレミヤの登場》

アモン暗殺の後、「地の民」に推挙されてヨシヤが王位に就いた時、彼はまだ8歳であった（前640年）。ヨシヤ王の時代は、国際情勢が急激に変化した時代であって、この事がいわゆる〈宗教改革〉を可能にしたのだが、同時にユダの国力回復が一時的なものに終わったのも、また国際情勢から説明出来る。630年頃アッシリア王アッシュルバニパルが死亡すると、アッシリア帝国の支配は急激に動揺した。北方では騎馬民族スキタイ人の動きが活発となり、混乱に乗じてメソポタミアでは、625年「カルデア人」のナボポラッサル(Nabū-apla-ušur)がバビロニア王を宣言した。ここに新バビロニア帝国の基礎が築かれることになったのである。エレミヤが預言者としての〈召命〉を受けたのはこの頃のことであったと思われる（エレミヤ書1章4節以下参照）。ヨシヤ王の治世第18年（前622年）「律法の書」（おそらく申命記法典の中核）が、エルサレム神殿で発見され、これにもとづいて宗教改革が断行された（列王紀下22章以下）。この祭儀上での改革は、長期に及んだアッシリア隷属からの独立を願う人々によって一定の支持を得ていたものと思われる。この時期にユダ王国が領土を拡大したことも確実である。しかし、ヨシヤ王の宗教改革は内外のさまざまな矛盾に直面して、成功したとは言えないものにとどまった。これは後のエレミヤによる神殿批判に照らしてみても明らかである（エレミヤ書7章、26章参照）。

《メギドの戦いによるヨシヤ王の戦死》

616年ナボポラッサルは、アッシリアと対決するためユウフラテス河上流にまで軍を進めた。劣勢のアッシリア軍はハランに立て籠もるが、パロ・プサメティコス（第26王朝）の率いるエジプト軍がアッシリアを援助したため、バビロニア側は決定的な勝利をおさめることが出来なかった。エジプトがかつての敵であったアッシリア側についたことは、当時の複雑な国際関係を物語っている。そうこうするうちに、インド・ヨーロッパ系のメディア人が行動を開始し、614年にアッシュールを陥落させた。612年には、アッシリアの都ニネヴェがついに陥落するが、この時都を包圍攻撃したのは、バビロニアとメディア＝スキタイ連合軍であった。ニネヴェ陥落が当時の世界にとって

いかに衝撃的な事件であったかは、ナホム書によって知られる。なお、ナホム書には哀歌と共通する文学的技法が見られる（特に3章）。

アッシリアの勢力は、ニネヴェ陥落以後もまだしぶとく生き残っていた。アッシュルウバリトがハランで王と称していたからである。バビロニア＝メディアの新勢力が強大化するのを恐れたエジプトは、アッシリアを積極的に支援した。609年、新しくバロに即位したネコ2世は、全軍を召集してシリアに向かった。ところが途中メギドではユダの王ヨシヤがこれを阻止しようと待ち構えていたのだった。ヨシヤは、親バビロニア政策を取ろうとしたのであろうか。しかし、ユダ軍がエジプト軍に対抗することは、とうてい無理な話しであった（列王紀下23章29節）。

3.2. 前597年の第1次バビロン捕囚まで

《カルケミシュの会戦》

609年エジプトの援助も空しくアッシリアは、約1400年の歴史の幕を閉じた。アッシュルウバリトの最期については、分かっていない。ともかくバロ・ネコの遠征によってシヤ・パレスチナ地方は、しばらくの間エジプトの支配下に入った。戦死したヨシヤに替わってすぐにエホアハズ(ヨアハズ)がユダの王となったが、彼は父王の政策を続行しようとしたのであろう、3ヵ月後にはネコによってリブラ(Ribla)に幽閉され、廃位させられた。またユダ王国には多額の貢納金が課せられた（列王紀下23章30～33節）。エホアハズ(シャルム)の運命についてはエレミヤ書22章10～12節に記述がある。ネコは、エホアハズの兄エホヤキム(ヨヤキム)を王位に就けた。エホヤキムは、エジプトに支払うべき貢納金のために、人民に重税を課した（列王紀下23章35節）。

この間にユダ王国を取り巻く国際情勢は、激変した。605年ユウフラテス河畔のカルケミシュの会戦において、エジプトはバビロニアに敗れた。エレミヤ書46章2節には「ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの第4年に、バビロンの王ネブカドレツアルがこれ(=バロ・ネコの軍勢)を打ち破った」との記事がある。これはD・J・ワイズマン(Wiseman)が1956年に発表した「バビ

ロニア年代記」の記述と完全に一致する。⁽²⁹⁾ 606年からカルケミシュの周辺では戦闘が始まっていたが、エジプト側が優勢であった。すでに老齢となっていたバビロニア王ナボポラッサルは、605年、遠征の指揮を王子のネブカドネツアル(Nabū-kudurri-ušur)に委ねた。ネブカドネツアル軍は、たちまちユウフラテス河を渡りカルケミシュに突入したので、エジプト軍は敗走した。⁽³⁰⁾ エジプトの残った兵力は、ハマトでも粉砕されて壊滅した。ナボポラッサルは、この年に死亡し、替わってネブカドネツアルが王位に就いた(エレミヤ書25章1節)。この時からシリア・パレスチナの覇権は新バビロニアに移った。

《第1次バビロン捕囚》

ネブカドネツアル(605-562年在位)は、「バビロニア年代記」によればその治世の第1年から第11年まで繰り返しシリア・パレスチナ遠征を遂行している。この中でエジプトに頼ったアシケロンに対する処罰は特筆に値する(604年、エレミヤ書47章5～7節参照)。列王紀下24章1節のエホヤキムのバビロニアへの服属は、この事件をきっかけにして始まったものであろう。列王紀は、同時にこの服属が3年間しか続かなかったことを述べる。この記事は、601年のネブカドネツアルによるエジプト遠征失敗の出来事によって説明出来る。エホヤキムは、預言者エレミヤの警告を無視してバビロニアへの貢納を停止した。これは致命的な政策の誤りであった(J・グレイの説ではエホヤキムが貢納を停止したのは前599年)。ネブカドネツアルは、すぐに直接行動はしなかったが、カルデア人、アラム人、モアブ人、アンモン人の軍勢がユダに向けられた(列王紀下24章2節)。599～598年には、ネブカドネツアルはシリア・パレスチナ東部の荒野にいるアラブ諸部族を撃った。エレミヤ書49章28節以下のケダルとハツォルに関する預言は、このことに関連するものであろう。十分な準備を整えた後で、ネブカドネツアルはユダに向かって進撃を開始した。ネブカドネツアル治世第7年キスレウ月、すなわち紀元前598年12月のことである。「バビロニア年代記」は、アダル月の第2日、すなわち597年3月16日にバビロニア軍がイェルサレムの町を奪取し、その王を捕らえたことを語る。抵抗や破壊、エジプトからの援軍については、年

代記も列王紀も何も語っていない。列王紀によるとバビロニアに降伏した王は、エホヤキン(ヨヤキン)であった。彼が3ヵ月王位にあったとの記事(列王紀下24章8節)から逆算すると、父のエホヤキムが死んだのは、ちょうどバビロニア軍が前進を始めた時にあたる。エホヤキムの死が〈自然死〉によるものであったかどうかは、歴史家たちによって疑問視されている(エレミヤ書22章18節以下、36章30節参照)。

エホヤキンが無条件降伏したことによって、都は破滅からは救われた。しかし反逆の代償は軽くはなかった。王であったエホヤキンは捕虜としてバビロンに連行され、37年間投獄された後、釈放された。彼に替わって伯父のマタンヤ(ゼデキヤ)が王位に就けられた。王族、高官のみではなく、民の有力者、祭司や職人までもが捕囚としてバビロンに連行された。この中には祭司エゼキエルも含まれていた。これらの捕囚民の数は、旧約の中で相互に矛盾している。エレミヤ書52章28節は、総数3023人とするが、列王紀下は1万人(24章14節)とか、軍人7000人、職人と鍛冶屋1000人のような数字を挙げている(24章16節)。おそらく1万人は、多すぎるであろう。しかし、ともかく「地の民の貧しい者たち(ダツラト・アム・ハー・アーレツ)」(24章14節)以外の多数の住民が捕囚となったのは事実であろう。神殿と王宮からは莫大な宝物が戦利品として持ち去られた。神殿の宝物の掠奪については、後にエレミヤとハナンヤの対決でこれが主要な論争点となったように、当時の人々にとっては非常に重大な事件と受けとめられていた。

3.3. ユダ王国の滅亡

以上のような苦い経験の後で、バビロニアへの服従を条件として王位に就けられたゼデキヤ(ツエデキヤ)であったが、彼はたちまち反バビロニアの陰謀に巻き込まれた。われわれにはとても考えられない事かも知れないが、ゼデキヤは、ほんのしばらくの表面上の従順の後、無謀にもバビロニアに対する反乱を企てて自滅した。第1回捕囚から数えてわずか11年後、すなわち紀元前587/86年に都エルサレムは滅亡した。ゼデキヤはよほど性格が弱かったのであろうか、預言者エレミヤのこぼれ話を繰り返す耳にしながら、結

局はこれを聞き入れることは出来なかった(例えばエレミヤ書21章1～7節、38章14節以下参照)。多くの知識人が捕囚となった後では、王の側近に有能で賢明な人々を得ることが無理だったのかも知れない。ともかく、ユダの自滅への道は、われわれには愚行の連続にしか見えない。この間の出来事を、順を追って見て行くと以下ようになる。

ゼデキヤ治世の初め(597年)：エドム、モアブ、アンモン、テュロス、シドンの王たちからの使者がイエルサレムを訪問した。エレミヤは軛と綱を首にはめて使者たちの前に登場し、反バビロニアの企てに対して警告を発する(エレミヤ書27章)。

ゼデキヤ治世第4年(594年)：親バビロニア派と反バビロニア派の対決。5月に預言者エレミヤとハナンヤが対決した。7月にハナンヤが死ぬ(エレミヤ書28章)⁽³¹⁾。エレミヤがバビロンの捕囚民に宛てた手紙を送ったのは、この頃の事である(29章)。なおバビロンの東ケバル川のほとりで預言者エゼキエルが召命を受けたのは、この翌年である(エゼキエル書1章2節)。

ゼデキヤ治世第9年(589年)10月10日：バビロニア軍がイエルサレムに到着し、包囲攻撃を開始した。

ゼデキヤ治世第10年、ネブカドネツアル治世第18年(588年)：一時、エジプト軍が進撃してきたために、バビロニアが包囲を解いた(エレミヤ書37章5節)。この時、イエルサレムから出ようとしたエレミヤは逮捕され「監視の庭」に留置された(エレミヤ書37章12節以下)。彼がアナトトの畑を購入したのはこの頃である(エレミヤ書32章)。エジプトは、ユダの反乱を援助する約束をし、それを実行しようとしたのだろう。しかしエジプト軍はすぐに退却してしまった様子である(エゼキエル29章以下をも参照)。

ゼデキヤ治世第11年、ネブカドネツアル治世第19年(587/6年)：包囲されたイエルサレム城内で飢饉がひどくなった頃、バビロニア軍が城壁を破って侵入した。ゼデキヤは、夜の間にも都を抜け出しアンモンに逃れようとしたが、エリコの近くで捕まえられて、オロンテス河畔のリブラまで連行され処罰された(列王紀下25章2～7節、エレミヤ書52章5節～11節)。なおこの出来事は哀歌4章19～20節に反映されている可能性がある。この1ヵ月後、

ネブカドネツアルの親衛隊長ネブザルアダンによって神殿、王宮、家屋に火が放たれ町は徹底的に破壊された。神殿は掠奪され、城壁は取り壊された(列王紀下25章8節以下、エレミヤ書52章12節以下)。このときに起こったいわゆる〈第2次バビロン捕囚〉の様子は、判然としない。祭司や書記などはリブラで処刑された(列王紀下25章18～21節)。エレミヤ書52章29節は、832人だけが捕らえ移されたと述べる。

その後、バビロニアは、ミツパに総督ゲダルヤを置いて残った民を統治させたが、反バビロニアのアンモンと結んだイシュマエルによって暗殺されてしまった(列王紀下25章22節以下。この間の事情はエレミヤ書40～41章に詳しい)。この事件が正確にいつ起こったのかは分からない。ともかくこの事件をきっかけに残された民はさらに散り散りになってしまった。

ネブカドネツアル治世第23年(582年)：再度、745人が捕囚となった(エレミヤ書52章30節)。これが捕囚期のユダに関する最後の情報である。

4. 哀歌第2章

4.1. 第2のアルファベット歌の逐語訳⁽³²⁾

- 1 ああ、何と、
主はシオンの娘を、御怒りをもって辱めた。
イスラエルの輝きを、天から地に投げつけた。
御怒りの日に、その足台を顧みはしなかった。
- 2 主はヤコブのすべての牧場を根絶し、容赦しなかった。
ユダの娘の要塞を、その憤激をもって引き裂いた。
王国と彼女の高官たちを、地に打ち倒して汚した。
- 3 怒りに燃えて、イスラエルの角をみな切り倒し、
敵の面前から、彼の右手を引き戻した。
周囲をなめ尽くす烈火のごとく、彼はヤコブのうちで燃え上がった。
- 4 敵のように弓を引き絞り、彼の右手をしっかりと立てて、

- 眼にいとしい者たちをみな、仇敵のように殺害した。
シオンの娘の天幕に、彼の憤りを火のように注いだ。
- 5 主は敵のようになって、イスラエルを根絶した。
彼女の高殿をみな根絶し、彼の要塞を滅ぼした。
そして、ユダの娘に悲鳴と悲嘆とを増し加えた。
- 6 彼はその小屋をぶどうの木のように乱暴に扱い、その祭りを滅ぼした。
ヤハウエはシオンで、祭りと安息日とを忘れさせた。
その怒りの呪いをもって、王と祭司とを拒絶した。
- 7 主は、その祭壇を放棄し、その聖所を汚した。
彼女の高殿の壁を、敵の手に引き渡したのだ。
彼らは、ヤハウエの家で祭りの日のように、声を張り上げた。
- 8 ヤハウエは、シオンの娘の壁を滅ぼそうと謀り、
測り縄を張って、滅亡から御手を引きはしなかった。
塀をも壁をも彼は嘆かせた。それらはともにくずおれた。
- 9 彼女の門は地に沈み込んだ。彼女の門を彼は壊し、打ち砕いた。
彼女の王も高官たちも異邦の民の中（にあり）、律法はない。
彼女の預言者たちもまた、ヤハウエからの幻を見ることはない。
- 10 シオンの娘の長老たちは、黙って地に座り、
頭の上から塵をかぶって、粗布を身にまとう。
イエルサレムのおとめたちは、頭を地にすりつけた。
- 11 わたしの眼は涙の中に消え去った。わたしの内臓は煮え返る。
わが民の娘の破滅のゆえに、わたしの肝臓は地に注がれる。
幼な子も乳飲み子も、街の辻々で憔悴している。
- 12 母親たちに彼らは言う、「穀物とぶどう酒はどこ」と。
町の辻々で、致命傷を負った者のように憔悴しきって、
彼らの命を母親のふところに注ぎ出しながら。
- 13 何で、わたしはおまえを力づけようか。
何におまえをたとえようか、イエルサレムの娘よ。
おまえを何と比べて、慰めようか、おとめ、シオンの娘よ。

おまえの損害は、海のように大きいのだから、

だれがおまえを癒せようか。

- 14 おまえの預言者たちは、虚飾と粉飾の幻をおまえに見せた。
命運を転じるために、おまえの罪をあばこうとはしなかった。
彼らは、虚しい人を惑わす託宣を、おまえに見せた。
- 15 道を通りすぎて行く人はみな、おまえに対して手を打ち鳴らした。
イエルサレムの娘に、口笛を吹き、頭を振った。
「これがあの美の極み、全地の喜びと言われた町なのか」と。
- 16 敵はみな、おまえに対してあんぐりと口を開けた。
口笛を吹き、齒をむき出して、
彼らは言った、「われわれは根絶した。
これこそまさにわれわれが待望していた日だ。しっかり見届けた」と。
- 17 ヤハウエは計画していたことをなし遂げた。
彼の言ったことを貫徹した、
いにしえの日から命じていたことを。引き裂き、容赦はしなかった。
おまえに対して敵を喜ばせ、おまえの仇敵の角を高く掲げた。
- 18 「シオンの娘の城壁よ！ 主に向かって心から泣き叫べ。
川のように涙を流れ下らせよ、昼も夜も、
おまえに休憩を与えるな。おまえの瞳を休ませるな。
- 19 夜に立ってわめけ、夜警の始まりの度毎に。
主の御顔に向かって、おまえの心を水のように注ぎ出せ。
おまえの幼な子らの魂のゆえに、彼に向かって両手を掲げよ。
〔街頭のいたるところで、飢えて、憔悴しきった者たち〕]。
- 20 「ヤハウエよ、見てください。ご覧になってください。
だれにあなたはこのようなことをされたのですか。
女たちが彼らの実を、元気に生まれた子どもを
食べてもよいでしょうか。
祭司と預言者が主の聖所で殺害されてもよいでしょうか。
- 21 少年も老人も、街路で地に伏しています。

わたしのおとめたちも、若者たちも、剣に倒れました。

あなたの怒りの日にあなたは殺害し、虐殺し、容赦されませんでした。

22 あなたは祭りの日のように、

わたしの恐怖（するもの）を周囲から呼び集められます。

ヤハウエの怒りの日には、逃れた者も残った者もいませんでした。

わたしが元気に生んで、大きくした者たちを、敵は絶滅しました。

※（ ）は、翻訳に際して補った語であることを示す。また〔 〕は、後代の付加であるから、削除すべき箇所であることを示す。

4.2. 哀歌2章の語句注解⁽³³⁾

1節1行目「辱めた」。この動詞はハパクスレゴメノンであって、正確な意味は分からない。「雲でおおう」「曇らせる」のような訳語も考えられているが、これでは表現として弱すぎるように感じられる。「軽蔑する」「卑しめる」(新共同訳)あるいは「辱める」(Rudolph等)と解する説に従う。1節2行目には、神話的表現が見られる。「イスラエルの輝き」ないし「イスラエルの美」とは、神の選ばれた都イエルサレムをさす(2・15・3参照)。ここにイスラエルの中央聖所があった故に、天上の神の都の美を写し出しているものと考えられた。天上からの落下の比喩に関しては、イザヤ書14・12以下、エゼキエル書28・17を参照。1節3行目「その足台」。神殿の聳える聖なる山は、天上に座すヤハウエの足台と考えられた(詩篇99・5、イザヤ書60・13等参照)。

2節1行目「根絶する」。直訳すると「呑み込み」。この動詞は2章で繰り返し使用されている(2・5・1、2・5・2、2・8・2[滅亡]、2・16・2)。

3節1行目「イスラエルの角」。牛、山羊、羚羊などの角は、守備用あるいは攻撃用の武器である。このことから「角」は、軍事力の比喩となった(エレミヤ書48・25、詩篇75・11、92・11、申命記33・17参照)。3節2行目「彼の右手」。ヤハウエの右手は、元来ヤハウエがイスラエルの敵と闘い、敵を打倒する力を象徴する(出エジプト記15・6、詩篇60・7、118・15以下

等)。ところが、今、ヤハウエは敵と闘うことをやめた(詩篇74・11を参照!)ばかりではなく、イスラエルに対して「敵のように」(4～5節) 振舞う。

4節1行目「彼の右手をしっかりと立てて」。マソラが正文かどうか疑われている。右手は女性名詞であるが、動詞 *niṣṣāb* は、ニファル、現在分詞の男性形になっている。さらに2行目の語順もまともではない。「仇敵のように」が冒頭に来て、「そして殺害した」と動詞のワウ継続未完了形がくる。そこでまず、*niṣṣāb* の *b* を前置詞と見て「彼の右手に」と読み、その前の語を「矢」 *hēs* に変更する。2行目の「そして殺害した」の前に「彼は撃った」 *hikkāh* のような動詞の完了形を挿入する(イザヤ書27・7参照)等の提案がなされている(Kaiser等)。私訳ではマソラを正文と見て、無理に訳した。4節2行目「眼にいとしい者たち」マハマッデー・アーイン。マハマードは1章では「宝物」と訳される語である(1・10・1、1・11・2)。

5節3行目「悲鳴と悲嘆」ヘブライ語では、タアニーヤー・ワアニーヤーと語呂合わせになっている。同じ表現がイザヤ書29・2にもあることが注目される。

6章1行目前句のマソラは「彼はその小屋を園のように乱暴に扱った」となっている。「その小屋」の綴り字には問題があるが一応正文とみなせる。「ぶどうの木のように」は七十人訳に従う読み方である。「その小屋」は、イエルサレムの神殿をさすのであろう。この行の後句からも祭儀の中心であった神殿の徹底的な破壊に言及したものと解釈される。なお、並行法から見て1行目のモーエード「祭り」は「祭りの場」、2行目の「祭り」は「祭りの日」を意味する。

7節1行目「汚した」。動詞ニエールは、他に詩篇89・40にしか用例がない。正確な語義を確定することは困難である。7節3行目、神域での祭りの日の歓喜の叫び声が、神殿に侵入した敵の軍勢の雄叫びに変わったことを述べる(詩篇74・4、23参照)。

8節2行目「測り縄を張って」。ヤハウエを測り縄を手にする建築士にたとえて(列王紀下21・13、イザヤ書34・11参照)、ヤハウエがイエルサレムの破壊を計画的に遂行した(17節参照)ことを表現する。8節3行目「くずお

れた」。この動詞は、ふつう植物が「枯れる」「しおれる」の意味で用いられる。城壁の崩壊を植物がしおれる様にたとえた。

11節1行目「わたしの眼は涙の中に消え去った」。涙で眼が見えなくなることの誇張的表現（哀歌4・17、詩篇69・4参照）。「わたしの内臓は煮え返る」と同じ表現が1・20・1にある。Driverは、シュンマコス訳などを参照して「わたしの内臓はよじれる」と訳すよう提案する⁽³⁴⁾。11節2行目「わが民の娘の破滅のゆえに」は、特にエレミヤ書的な表現である。エレミヤ書8・21にはまったく同じ表現があるし、8・11には「わが民の娘の破滅」、6・14には「わが民の破滅」とある。下記の哀歌2章13節の注解を参照。さらに本論考4.3.1～2を参照のこと。11節3行目および12節2行目「辻々で」。「広場」「辻」を意味するレホーブの複数形が用いられている。レホーブは、町の門の内部ないし門の周辺の広場を言う。ここは、単なる通路ではなくて、平時では人々が立ち話をしたり物売り買いしたりするような場所である。

12節2行目「致命傷を負った者のように」。直訳すると「刺された者のように」であるが意識した。12節3行目「彼らの命（ネフェシュ=息）を注ぎ出す」は、幼な子たちの生命が尽きようとしている様を表す。

13節1行目「何で、わたしはおまえを力づけようか」。この動詞のヒフィル形の基本的な意味が「証人として立てる」ないし「勧告する」であるために、マソラが正文であるか否かが問題になる。ヴルガタ訳の *comparabo te* を参照して「何に、わたしはおまえを比べようか」と読む者もいる。しかし、この動詞のポーレール形やヒトポーレール形から「力づける」「元気づける」「励ます」を推定する者がいる(Gordis等の説)。また「勧告する」からそのような語義を推定することも不可能ではない。このように読むと、1～2行目の動詞の配列には「力づける」「たとえる」「比べる」「慰める」と *ab/b'á* のキアスムスが認められることになる。13節3行目の「損害」と訳した語は、11節2行目の「破滅」と同じ語であり、やはりエレミヤ書と比較することが出来る。ここでは動詞「癒す」と対になっていることが注目される（エレミヤ書6・14、8・11参照、イザヤ書30・26をも参照）。さらにエレミヤ書14・17とは、「損害」＝「破滅」が「大きい」という表現が共通する。

14節1行目「虚飾と粉飾」シャーヴ・ヴェターフェール。シャーヴは3行目では「虚しい」と訳した。「虚しい幻」「虚しい幻を見る」と言う表現は、エゼキエル書に繰り返し出現する(12・24、13・6、7、9、23、21・34、22・28)。ターフェール「粉飾」は、壁の「上塗り」から転じて「うわべの飾り」を意味する。これも特にエゼキエリ的な表現と見ることができる(エゼキエル書13・10以下、14以下、22・28参照)。王国時代末期に、預言者たちが人々に空疎なばら色の幻を描いて見せただけだったことは、エレミヤ書とエゼキエル書で厳しく批判されているが、哀歌2章はこのような伝承の流れを共有している。またこの事との関連で、エレミヤ書28章のエレミヤとハナンヤの対決の物語が問題になる。14節2行目「おまえの命運を転じるために」。新改訳はマソラのケティープから意識して「あなたの捕われ人を返すために」としているが、ここではケレーに従うべきである。民の罪過を明らかにすることが、神から委託された預言者の使命なのであり、このような預言者の活動による民の神への〈立ち返り〉によってのみ民の命運の〈転換〉＝〈返らせること〉も可能となるのだという思想が、ここから読み取れる。14節3行目「託宣」と訳したマスオート(マッサーの複数、連語形)について、正文か否かが論じられている。詩文としてのリズムを整えるべきだという立場からすると、ここに何らかの〈切れ〉が要求される。このような観点から、マッサーオートと絶対形に読む(Kraus等)とか、マッシャーオート「欺瞞」(複数、絶対形)とするなどの提案がなされてきた。しかし、私訳では一応、マソラを正文として訳した。なお「人を惑わす」と訳した語(ヘブライ語では名詞、複数形)は、ハバクスレゴメノンであって正確な語義は分からない。〈託宣を(幻にして)見せる〉などというのは、日本語の表現としては多少おかしいが、ヘブライズムとしては不自然ではない。預言者の見る幻とことばとは、しばしば不可分一体の現実であった。

15節3行目「美の極み」。エゼキエル書27・3、28・12では、テュロスに関連してこの表現が用いられている。また「全地の喜び」は、詩篇48・3にエルサレムに関して用いられている。詩行として、ここは長すぎるので、どちらかの表現を削除するべきであると考えられるが、どちらを削除するのか

決め手になる根拠がない。

15節1～2行目と16節1～2行目には、相手を軽蔑、嘲笑するときのしぐさが重畳して出て来る。「手を打ち鳴らす」は、喜び賛美する場合(詩篇47・2等)だけではなく、嘲笑を浴びせる際にも用いられた(ヨブ記27・23)。「頭を振る」は、詩篇22・8、エレミヤ書18・16、イザヤ書37・22等を、「歯をむき出す」は、詩篇35・16、37・12等を参照。なお、16節の「口を開ける」「歯をむき出す」「彼らは言った、『われわれは根絶した(=呑み込んだ)』」「見た」という一連の表現が、詩篇35篇の16、21、25各節にも連続して出現する。この事は、哀歌2章の中のこれらの表現が直接的に詩篇35篇に依拠するものであることを必ずしも意味しない。両者が「個人の嘆きの歌」の類型を共有していることから来る一致と見た方がよいように思われる。⁽³⁵⁾

17節1行目「計画する」「熟慮する」語根 zmm と「なし遂げる」「する」語根 sh の組合せについては、エレミヤ書51・12後半、ゼカリヤ書1・6後半を参照。この節の背後にある「神学思想」については、哀歌の成立年代とも関連して別に考察を要する。

18節1行目「シオンの娘の城壁よ！主に向かって心から泣き叫べ」。マソラを直訳すると「彼らの心臓が主に向かって泣き叫んだ(完了形)。シオンの娘の壁よ」とでもなる。これではまともな意味をなさないとして、古くから色々な読み変えの提案がなされてきた。問題は以下の3点に要約できる。⁽³⁶⁾
(1)マソラでは完了形になっている冒頭の動詞「泣き叫ぶ」について。(2)2つ目の語リッバームについて。(3)「城壁」を意味するホーマトが正文なのかどうかについて。まず(1)については、ほとんどすべての注解者が、これを2人称、女性、単数の命令形ツァアキー「泣き叫べ」に変更する。(2)については、意見が分かれる。19節2行目にもある「おまえの心(臓)」(Ewald等の説)や lak (命令形の後に付く dat. ethicus)などに変更する意見が多いが、リッバームのままで副詞的に「心から」と解釈する者もある(McDanielや Hillersの説)。(3)「城壁」に対する呼びかけは、不可能だとして、BHSも提案しているように「わめけ」「呻け」を意味するヘミーに読み変える注解者が多い。しかし、イザヤ書14・31にはこの箇所と非常によく似た「門よ、泣きわめけ」

と門を擬人化した表現がある（既に Keil が指摘している）から、このような表現をまったく不可能とすることも出来ない。そこで、私訳では冒頭の動詞を命令形に変更するだけで、あとはマソラを正文と見た。しかしながら、このように解釈すると 2 行目以下で命令や禁止が向けられている「おまえ」も「城壁」を指すことになって、やや不自然な表現が連続することにならざるをえない。18 節 3 行目「休憩」プーガトは、ハパクスレゴメノンであるが、動詞の語根 *pwg* から派生した名詞と考えると、創世記 45・26、詩篇 77・3 から生活活動を停滞ないし鈍化させることを意味すると推定できる。なお「瞳」は、ヘブライ語では「眼の娘」と言う表現になる。

19 節 1 行目「夜警の始まりの度毎に」。「夜警（複数形）の始まりに」は、夜警の交替時の度毎に、つまり夜を徹しての意味であると解釈した。「おまえの心を注ぎ出せ」は、くおまえの心の内奥にある思想感情を神の御前で表現しなさいの意味である（詩篇 62・9 参照）。19 節 4 行目は、2・11 以下と 4・1・2 に基づく後代の付加と判断される。2 章でこの節だけが 4 行になっているという形式上の理由の他に、説明文の文体をしている事が判断の根拠になる。ここは、受動分詞の複数形に定冠詞のついた「憔悴させられた者たち」で始まる名詞文なのである。

20 節以下のこの歌の終結部には、カニバリズムを含む虐殺の生々しい描写が置かれている。作品の閉じ方として独特である。

22 節「わたしの恐怖するものを周囲から」と訳した箇所については、解釈に問題がある。マソラでは、*m'gûraj missäbîb* メグーライ・ミッサービーブとなっているが、メグーライの意味は、ヨブ記 18・19 を参照して「わたしの滞在地」「わたしの住みか」であると推定される。これではまったく文脈にあわないが、エレミヤ書にはこれと非常によく似た「周囲からの恐怖」*mägôr missäbîb* マーゴール・ミッサービーブという定型表現がよく出て来る（6・25、20・3、10、46・5、49・29）。そこで、元来ここには「周囲からわたしを恐れさせるもの」のような表現があったのが、何らかの誤記によって現在のマソラ本文が生じたのではないかと推定される。*Rudolph* は、動詞 *gwr* のポーレール形分詞に人称接尾辞のついた *m'gôr'raj* を推定している（ヴルガ

タ訳と一致)。私訳は、一応このような見解に従ったが、動詞 gwr の語義には「攻撃する」もある（詩篇59・4参照）ところから、「わたしを周囲から攻撃するものたちを」と訳す者もいる（Hillers 等）。

4.3. 文学的技法

4.3.1. 第2歌でまず注目されるのは「……の娘」という表現が目立って多いことである。⁽³⁷⁾冒頭の2・1・1にまず「シオンの娘」が出現する。以後「シオンの娘」が5回現われる（2・4・3、2・8・1、2・10・1、2・13・2、2・18・1）。「ユダの娘」は2回（2・2・2、2・5・3）ある。特にエレミヤ的な表現である2・11・2の「わが民の娘」については、すでに考察した。このような表現の変異として「イエルサレムの娘」(2・13・1、2・15・2)や「イエルサレムのおとめたち」(2・10・3)や「おとめ、シオンの娘」(2・13・2)がある。これらはいずれもイエルサレムあるいはユダの町やその住民をさす慣用的な比喩表現である。ただし、10節の「イエルサレムのおとめたち」の場合には、同じ節の1行目の「シオンの娘の長老たち」ないし「シオンの娘の老人たち」と対応するから、文字通りの意味にもなる。更に、よく似た表現法としては2・1・2の「イスラエルの輝き」がある。これは1行目の「シオンの娘」と並行している。3節の「イスラエルの角」もこのような関連で捉えることが出来る。

ところでこのような表現がどこに用いられているかを見ると、1～5節の作品の冒頭部と11節あたりを中心にする中央部に集中している。作品の終わりの方では18節に「シオンの娘」が出るだけである。これはおそらく、同じ節の「おまえの瞳」＝「おまえの眼の娘」との関連で考えられる。以下に考察するように11～12節の周囲にはいわゆる〈集中構造〉が認められる。

4.3.2. 11～12節を中心とする〈集中構造〉: 22節からなる作品の丁度中央部に集中構造が見い出せることは、古くから観察されていた。⁽³⁸⁾まず動詞 špk「注がれる」(11節)と「注ぎ出す」(12節)、動詞‘tp「憔悴する」(11節)と「憔悴させる」(12節)が対応している。「街の辻々で」(11節)と「町の辻々で」(12節)の並行も明瞭である。今、špkの派生語をa、‘tpの派生語をb、「…の辻々で」をcと置けば、abc/b’c’a’の一種のキアスムスを認めることが

出来る。さらに11~12節の中心にくる2・11・3と2・12・1には「幼な子と乳飲み子」に対応して「母親たち」が配置されている。ここで11~12節のマソラの子音テキストをそのまま転記すると以下ようになる。なおダゲシュは無視してある。

11節

- 1) k l w b d m ' w t ' j n j わたしの眼は涙の中に消え去った
 ḥ m r m r w m ' j わたしの内臓は煮え返る
- 2) n š p k l ' r š k b d j わたしの肝臓は地に注がれる
 ' l - š b r b t - m j わが民の娘の破滅のゆえに
- 3)

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| b | ' | t | p | | |
| b | r | ḥ | b | w | t |

 ' w l l w j w n q 幼な子も乳飲み子も、憔悴している
 q r j h 街の辻々で

12節

- 1) l ' m t m j ' m r w 母親たちに彼らは言う
 ' j h d g n w j j n 「穀物とぶどう酒はどこ」
- 2)

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| b | h | t | ' | t | p | m |
| b | r | ḥ | b | w | t | |

 k ḥ l l 刺された者のように憔悴しきって
 ' j r 町の辻々で
- 3) b ḥ š t p k n p š m 彼らの命を、注ぎ出しながら
 ' l - ḥ j g ' m t m 母親のふところに

この中央部のすぐ外側を観察すると、ここを囲むようにして、「シオンの娘」(8節、10節)「イエルサレムのおとめたち」(10節)と「イエルサレムの娘」(13節)「おとめ、シオンの娘」(13節)「イエルサレムの娘」(15節)が配置されていることが分かる。そしてこれらの中心には、11節の印象的な「わが民の破滅」

がある。

中心からやや離れるが、2・9・3には「預言者」「幻」(名詞)があり、2・14・1には「預言者」と「幻を見せる」(動詞)があつて、〈囲い込み〉を認めることが出来る。

4.3.3. 作品の中央部には、いろいろなレベルでの重畳表現が見られるが、訳文でも観察できるものから述べる。まず11節2行目の「地に」ラーアーレツに先行して、10節には「地に」ラーアーレツが2回用いられている(2・9・1にも「地に」パーアーレツがある)。なお、10節の1行目の「地に」「シオンの娘」と3行目の「地に」「イエルサレムのおとめたち」によって、この節に〈囲い込み〉が生じている。また12節の疑問文「穀物とぶどう酒はどこ」を受けるようにして、13節には「なに」マーで始まる疑問文が3回連続し、最後に「だれ」ミーで始まる疑問文が来る。身体の部位を表す語もこのあたりに非常に多いが、これは別に考察する。

次にアリタレーション(韻)を観察してみよう。11~12節には語頭に前置詞bが来る表現が、合計5回もある。しかもこの頭韻は、すべてコロン(句)の先頭で起こっている。このような頭韻が、「娘」bat「おとめたち」b'túlôtのbと関連することは言うまでもない。2・11・1の前句から2・11・2の後句までの4つのコロンにはアイないシイーの脚韻が認められる。特に「わたしの内臓」メーアイと「わが民」アムミーの語呂あわせが目立つ。またこれと関連して2・11・1にはm'j音が多い。12節3行目では、m音の脚韻があるが、これは13節のマー「何」、ミー「だれ」の頭韻を準備していることになる。

4.3.4. 身体の部位を表す語：ヘブライ語では「怒り」は「鼻」アフ、「前」は「顔」、「命」ネフェシュは本来「のど」ないし「息」である。このような表現を含めると、どのようなテキストでも身体語がかなり多いことになるが、この第2歌では特に目立って多いといえる。まず怒りを表現する「鼻」は、作品の冒頭と末尾に現われる(1~6節で合計4回、21~22節で2回)。特に、1~4節には身体語が多く、「足」「角」「右手」(2回)「顔」「眼」が出現する。次に集中しているのは、10~12節の中央部である。まず「彼らの頭」「彼女ら

の頭」から始まり「わたしの眼」「わたしの内臓」「わたしの肝臓」「彼らの命＝のど」「ふところ」と続く。すでに考察したことから了解出来るように作品の中央部には、あらゆる文学的技法が集中して用いられている。これにはもちろん理由があるはずである。ここで語られている内容は、敵の包囲攻撃の中で起こった激しい飢饉の一番の犠牲者となった幼いこどもの苦難なのである。第2歌の作者にとっての最大の関心事は、イエルサレムの住民、特に社会的な弱者の受けた苦難であることが、このような構造上の特徴からも明らかになる。

身体語は13～14節にはまったく見られず、15～19節に再び出現する。15～16節の表現に関しては4.2.の語句注解の項ですでに述べた。18～19節にもかなり集中して身体語が現われる。「心」が2回、「瞳」「頭」(「始まり」と訳した語)「顔」「魂」(＝のど)「両手」が各1回づつである(ただし19節4行目は計算に入れていない)。

このような身体の部位を表現する語が多用されていることは、この作品のなかでどのような効果を生み出しているだろうか。それはまず、疲れ切った身体、心身の分裂を暗示するだろう。そしてまた、作品の末尾で問題になる忌まわしいカニバリズムの情景を暗示するのではないだろうか。

4.3.5. 「敵」'ôjēb と「仇敵」šār とは、まず3～5節で多用されているのが目立つ(敵：2・3・2、2・4・1、2・5・1。仇敵：2・4・2)。16～17節にも3回用いられている(敵：1・16・1、1・17・3。仇敵：1・17・3)。その他には2・7・2と2・22・3に用いられているだけである。8～15節の中心部には1度も使用されていない。

4.3.6. 第2歌では「……のように」と言う表現も多い。この表現は3～5節で「敵」の用法と相互に重なって重畳して用いられている。この部分を詳しく見ると、「烈火のごとく」(2・3・3)「敵のように」(2・4・1)「仇敵のように」(2・4・2)「火のように」(2・4・3)「敵のように」(2・5・1)となっていて、すべて神の激しい怒りを表している。このことによって、イエルサレムに降りかかった災いが、あくまでヤハウエ(ないし「主」)の審判であることが強調されている。

敵の軍勢が歓声を挙げて突進する様を表現した「祭りの日のように」も 2・7・3と2・22・1で印象的に語られている。作品全体を3つのく大段落から構成されていると見るなら、これらは第1と第3の大段落のだいたい末尾に配置されていることになる(4.3.8.参照)。

また、「川のように」「水のように」が、2・18・2と2・19・2のシオンの娘の嘆きの部分に現われる。その他「ぶどうの木のように」(?、6節)「刺された者のように」(12節)「海のように」(13節)という表現が見られる。

4.3.7. 動詞では、破滅を表す表現が目立って多い。これらの動詞については、語句注解の部分ですでに言及しているので、簡単にまとめる。まず「根絶する」と訳したbl「呑み込む」がある。「滅ぼす」šhtは、2・5・2、2・6・1、2・8・1の3回用いられている。これらは作品の第1大段落に集中する。「滅ぼす」šhtは、元来、家畜の屠殺に用いられる専門用語であるから、非常に強い表現である。第2大段落の中央部では主として「打ち砕く」šbr(2・9・1)とその派生語「破滅」(2・11・2)「損害」2・13・3が用いられている。「引き裂く」は、2・2・2と2・17・2に現われる。さらに注目すべきなのが、作品の終結部におけるカニバリズムを含む破滅的なく死の描写である。20節2行目以下を、「殺害する」hrgの類義語に注目しながらもう一度読んでみよう。

女たちが彼らの実を、元気に生まれた子どもを

食べてもよいでしょうか。

祭司と預言者が主の聖所で殺害されてもよいでしょうか。

少年も老人も、街路で地に伏しています。

わたしのおとめたちも、若者たちも、剣に倒れました。

あなたの怒りの日にあなたは殺害し、虐殺し、容赦されませんでした。

あなたは祭りの日のように、

わたしの恐怖(するもの)を周囲から呼び集められます。

ヤハウエの怒りの日には、逃れた者も残った者もいませんでした。

わたしが元気に生んで、大きくした者たちを、敵は絶滅しました。

「虐殺する」と訳した語 $\text{t}b\check{h}$ は、 $\check{s}ht$ と同じく家畜の屠殺に用いられる動詞である。この部分の中央には「容赦されませんでした」という否定表現がある。このイディオムは、すでに $2 \cdot 2 \cdot 1$ と $2 \cdot 17 \cdot 2$ で反復されていたものである。ヤハウエが「容赦しない」で、ユダの民を滅ぼすというのは、エレミヤの預言に見られたものであることにも注意する必要があるだろう（エレミヤ書21章7節）。

4.3.8. 段落構成：われわれは、集中構造にまず注目して、そこから作品全体を見る方法をとった。すると9～14節あたりになんかなり明確な囲い込みを観察することが出来た。敵に関する語の分布や身体語の分布にも注意した。さらに「城壁」「要塞」「祭壇」「門」などの建築物に関する用語の分布についても調べることが出来るだろう。これらは2節から9節1行目までに集中して分布している。以上の観察を踏まえながら、主語の交替や話者の交替にも注目して段落構成を考えて見ると以下のようなになる。^(4.0)

第1大段落：1～8節。主語は「主」ないし「ヤハウエ」である。これをさらに、1～2節、3～5節、6～8節に区分できる。

第2大段落：9～14節。9節の位置付けは困難であるが、冒頭の動詞の主語が3人称複数形になっているので、ここに切れ目を認めることにした。中心が、11～12節にあるから、これに基づいてさらに小段落に分けることも可能だが、あまり意味がないように思われる。

第3大段落：15～22節。ここは、15～17節、18～19節、20～22節の小段落に明確に区分できる。これは〈話〉の引用の仕方によって確認できる。最後の20節以下のヤハウエに向かったの叫びは、非常に表現力に富んでいて印象的である。

(以下、次号につづく)

注

※ 筆者には、1995年度にドイツの Marburg 大学神学部での在外研究の機会が与えられた。本論考はその研究成果の一端であることを、関係者のみなさまへの感謝をこめてここに記す。

- (1) 1995年1月17日早朝、筆者の暮している西宮を含む兵庫県南部を大地震が襲った。わたしは大地とともに激しく揺れ、暗闇の中で死と滅亡を思った。あの時から、はやくも2年の歳月が流れた。同じ被災地の住民でも、ある人々にとっては地震は、ひとつの過去の出来事に過ぎず、表面的にはあの時の事をもう忘れていくのごとく生きている。しかし、駅前には空き地が虚しく広がり、山を見れば削り取られた地肌が痛々しい（それはしばしば〈復興〉の名のもとに行なわれている乱開発の結果であるが）。そして、六甲山の裏や海岸、市街地のいたる所に仮設住宅が並んでいる。仮設住宅でのいわゆる〈孤独死〉は、130名にも達しようとしており、それが減少する兆しはない。高いフェンスに囲まれた——それはもともとテニスコートだったからだが——仮設住宅の密集地の中に立つと〈強制収容所〉をどうしても思い出してしまう。被災地に住む者として、このような現実から目をそらした所での思想的営みは不可能であろう。否、かりにそのようなものが可能であるように見えても、それは無意味であろう。被災地の現実を、繰り返しく意味を問う。何の意味をか？ 多数の犠牲者の意味をか、あまりにも脆い現代文明の意味をか、それともわれわれが生き残ったことの意味をか？

地震災害の発生から時を遡ることによって、そこに因果の連鎖を見出し、それを現実に対する警告とするような知的作業は多く現われているが、特に『神戸黒書』労働旬報社発行、(1996年)が注目される。この書では、震災が単なる自然災害ではなく、過去から現在にまで及ぶ〈行政災害〉としての側面を持つことが徹底的に究明されている。

- (2) 本稿【付説：ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚】を参照。
- (3) 哀歌の神学思想についての従来の議論に対する Iain W. Provan の批判が、参考になる。Lamentations: NCB (1991) 20ff.
- (4) Renate Brandscheidt, Gotteszorn und Menschenleid, TThSt 41, Trier (1983); Otto Kaiser, Klagelieder: ATD16/2 (1992) 105f.
- (5) Michael S. Moore, Human Suffering in Lamentations: Revue Biblique 90 (1983) 534-555.
- (6) Delbert R. Hillers, Lamentations: AB 7 A (1972) Intro. XXXIX.
- (7) B. Albrektson, Studies in the Text and Theology of the Book of Lamentations with a Critical Edition of the Peshitta Text, StThL 21, Lund (1963)
- (8) H. Gottlieb, A Study on the Text of Lamentations, AJut XLIII, Th.S. 12, Aarhus (1978); Wilhelm Rudolph, Die Klagelieder: KAT XVII (1962); Hillers=注(6)。

- 他に、Arnold B. Ehrlich, *Randglossen zur hebräischen Bibel*, VI. Leipzig (1914) 30ff.; G.R.Driver, *Hebrew Notes on Song of Songs and Lamentations: FS A. Bertholet*, Tübingen (1950) 136ff.
- (9) 1章7節と2章19節は、それぞれ4行からなっているが、1行の付加があると推定される。詳細は、語句注解を参照。
- (10) strophe をく連と訳しておく、連は数個の行から構成され、行は通常く前句とく後句の2つのく句コロンからなる。連以上の単位は、く小段落く大段落のように名付ける。
- (11) S. Bergler, *Threni V – nur ein alphabetisierendes Lied? Versuch einer Deutung: VT* 27 (1977) 304ff.
- (12) H. Gunkel, *Klagelieder Jeremiae: RGG²3* (1929) 1049ff.; H.Gunkel und J.Begrich, *Einleitung in die Psalmen: HK.E*, Göttingen (1933, 1985⁴) 136.
- (13) Hans-Joachim Kraus, *Klagelieder: BK XX* (1956, 1983⁴) 8 ff.
- (14) 木田献一著「哀歌」『新共同訳旧約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局 (1992年) 501頁以下。左近淑著「詩篇および文学的小品」『総説旧約聖書』日本基督教団出版局 (1984) 485頁以下。
- (15) Hillers = 注(5)の論述による。
- (16) Thomas F. McDaniel, *The Alleged Sumerian Influence upon Lamentations: VT* 18 (1968) 198–209. なお、「ウルの滅亡哀歌」に関しては、五味亨訳『古代オリエント集』筑摩世界文学大系 1 (1978) 49頁以下を参照した。
- (17) 2章4節を2・4、2章4節1行目を2・4・1のように表記することがある。この方式では、章が省略されることはない。
- (18) Hermann Wiesmann, *Der planmäßige Aufbau der Klagelieder des Jeremias: Biblica* 7 (1926) 146–61. これに先立つ Max Löhr, *Threni III. und die jeremianische Autorschaft des Buches der Klagelieder: ZAW* 24 (1904) 1–16. でも、まだエレミヤ著者説が論証されると考えられていた。
- (19) J.Renkema, *The Literary Structure of Lamentations: W. van der Meer and J.C. de Moor, eds., The Structural Analysis of Biblical and Canaanite Poetry, JSOTS* 74 (1988) 294–396.
- (20) Renkema = 注(19) 388ff.
- (21) 【付説：ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚】を参照。
- (22) S.T.Lachs, *The Date of Lamentations V, JQR* 57 (1966/67) 46ff. は、第5歌をマカベア時代に年代付けるが、説得力はない。
- (23) たとえば最近では、Kaiser = 注(4)160が、前4世紀の作品とする。O. カイザー著、武田武長訳「哀歌」『ATD 旧約聖書注解16』ATD・NTD 聖書注解刊行会 (1989) 215頁。なお、この邦訳はATDの古い版 (1981年) からの翻訳である。

- (24) Kaiser=注(4) 105.
- (25) Hillers=注(6) XXXVII f.
- (26) Moore=注(3) 547ff.
- (27) 例えば、第2歌はまず10節までの大段落(Cantos)と11節以下の大段落に分けられる。後者はさらに11-17節と18-22節の中段落に分けられる。ここまでは、まだよいとしても、後者を11-13節、14-15節、16-17節のような小段落に区分しなければならない理由が分からない。彼が並行関係を認める語句の選択はしばしば恣意的である。第3歌の段落区分は、語の分布という非常に一面的な観察から出発している。
- (28) Siegfried Herrmann, *Geschichte Israels in alttestamentlicher Zeit*, München (1973); ジョン・ブライト著/新屋徳治訳『イスラエル史』聖文舎 (1968)。ヘンク・ヤーヘルスマ著/石田友雄監修『旧約聖書時代のイスラエル史』山川出版社 (1988)。J・G・マッキーン著/岩永博訳『バビロン』法政大学出版局 (1976)。山我哲雄・佐藤研著『旧約新約聖書時代史』教文館 (1992)。J.A.Thompson, *The Book of Jeremiah: The New International Commentary on the OT*, Eerdmans (1980); John Gray, *I and II Kings: OTL*, Westminster (1964); Robert P.Carroll, *The Book of Jeremiah: OTL* (1986)。
- (29) D.J.Wiseman, *Chronicles of Chaldean Kings in the British Museum*, London (1956)。
- (30) カルケミシュの会戦の記事は、ヨセフスの『ユダヤ古代誌』x, vi (秦剛平訳、旧約篇5、152頁以下参照)にもあって「バビロニア年代記」の記述と一致している。エレミヤ書46章3-12節は、この時の出来事に関するものである。
- (31) 荒井章三著「預言者対預言者——エレミヤとハナンヤ——」『キリスト教論藻』第25号 (1993) 11頁以下参照。
- (32) 第2歌が5つの歌の中でもっとも古いとの仮説に立って、分析を進める。そのために最初に第2歌を訳す。
- (33) 語句注解に際しては、注はなるべく省略する。先に挙げた注解書の他には、C.F.Keil, *Jeremiah, Lamentations: Commentary of the OT in ten Vol.* by C.F.Keil and F.Delitzsch, VIII, Eerdmans (1978); Karl Budde, *Die Klagelieder: KHC XVII* (1898); Otto Plöger, *Die Klagelieder: HAT I*, 18 (1969); W・J・フュアースト著、高尾哲訳「哀歌」『ケンブリッジ旧約聖書注解11』新教出版社 (1981) を参照した。
- (34) =注(8)137。KBL 第3版は、「燃える」とする。
- (35) Kaiser=注(4) 146は、どちらかが文学的に依存している可能性を否定しない。
- (36) Gottlieb=注(8) 35ff.
- (37) Hillers=注(6) XXXVII f.
- (38) A.Condamin, *Poèmes de la Bible*, Paris (1933) 49f. なお、この文献は入手出来なかったので Renkema=注(19) 307f. によった。

- (39) 第2歌の否定表現については、別に考察を要する。否定表現は第1歌に目立って多いので、これとの関係で論じることにする。
- (40) Kaiser=注(4)は、1~12節、13~19節、20節以下の3部構成と見ている。従来、11節までを最初の大きな切れ目とする第1歌の構成の分析からの影響であろうか、最初の大段落を長く見る傾向がある。たしかに、最初の大きな切れ目は、詳細に観察しないと見つけることが困難である。Krausは、1~10節で区切っている。このような段落構成の曖昧さは、このアルファベット歌が、実際に〈歌う〉よりも〈書く〉という行為の方に重点を置いた作品であったことをうかがわせる。歌うと言っても、楽器伴奏をもつような音楽作品でなかったことは明らかである。